

元気のヒント

◁90▷



徳島大学病院小児科講師

漆原 真樹

学校検尿は1973年に学校保健法(現・学校保健安全法)が改定され、74年に開始されました。当時は1年間に50日以上学校を欠席している「長期欠席者」の原因疾患として腎臓病が最も多く、全体の15%を占めていました。さらに小児は透析や移植などの治療がまだ十分に行えず、早期発見、早期治療により症状が出る前に管理することを目標として始まりました。

慢性糸球体腎炎

て予後も改善しています。慢性糸球体腎炎は、腎臓の糸球体に炎症が起こります。糸球体とは腎臓の細い血管が集まってできたもので、尿を濾し出す働きをしています。炎症によって糸球体が、尿と血液のふり分けができなくなると、尿に血液やタンパク質が漏れるようになります。

見た目に赤い尿を認めることもあります。特に初期は自覚症状がないため、学校検尿で見つかることが多く、発病の時期もはっきりしません。しかし、病型によってはそのまま放置しておくと、ゆっくり時間をかけて病気が進行し、やがて高血圧やむくみがみられることもあります。さらに進行すると、徐々に腎臓の働きが低下します。

原因については▽細菌や

学校検尿で早期発見を

ウイルスによる感染症▽免疫の異常▽遺伝子▽食物抗原などが関わっています。タンパク尿が認められ、まだよく分かっています。その程度によって許せん。学校検尿で見つかる慢性糸球体腎炎の中で、最も頻度の高い「IGA腎症」という病気があります。その原因の一つとして、何らかの感染症が引き金となって「免疫複合体」という異常な物質がたぐさん体の中に作られ、それが腎臓に沈着して炎症を引き起こされると考えられています。実際、風邪や胃腸炎をきっかけに尿所見が悪化する場合があります。

慢性糸球体腎炎は初期に自覚症状がないことが多いので、定期的に検尿で経過をみるのが大切です。ただし、初めての診察の場合、他の原因によって血尿やタンパク尿が出ていないかを確認するために血液検査や、超音波などの画像検査をします。

尿所見の程度が軽い場合、まずは定期的な検尿で経過観察を行います。血尿。近年は慢性糸球体腎炎に対する医療も進歩しており、入院による治療が必要だったお子さんも、退院後は健康な友達と同じように学校に行ったり、運動ができるようになったりしています。それにはやはり早期発見、早期治療が大切になります。学校検尿を毎年必ず受けるようにしましょう。(第2土曜日に掲載)

放置すれば腎機能低下